

# 令和6年度『大隅史談会』現地研修会

## 1 開催日時

令和6年11月17日(日) 8時30分～16時30分

## 2 集合時刻と集合場所

- ① 集合時刻 8時30分(出発は9時)
- ② 集合場所 鹿屋市役所 駐車場(鹿屋市共栄町20番1号 庁舎正面の広い駐車場)

## 3 募集人員

先着順に30名

## 4 参加費

バス代・保険代・資料代・弁当代込みで、一人1,500円です(当日、徴収)。

## 5 研修コースのスケジュール予定 (ルートを変更する場合があります)

9:00 鹿屋市役所出発 →9:10~9:30 **野口雨情の詩碑**(鹿屋市北田城山公園) →10:00 **野村伝四の生家** →10:00~10:20 **夏目漱石の俳句**(肝付町長能寺の野村傳四の墓) →10:40~11:00 **日高籾仙の歌碑**(肝付町昌林寺) →11:10~11:30 **道隆寺の歌碑** →**お手洗い休憩**(柏原海岸トイレ) →12:40~13:15 **昼食**(サンフラワー乗船ロビー) →13:30~13:40 **種田山頭火の句碑**(志布志市志布志駅前) →14:00~14:10 **夏井海岸の火砕流堆積物**(国指定) →14:20~14:35 **六部父娘の地蔵の辞世**(志布志市夏井) →14:45~15:00 **種田山頭火の句碑**(国民宿舎前とダグリ岬遊園地公園前) →15:25~15:40 **肆部合(しぶあい)の板碑**(志布志市有明町野井倉字木森) →16:30 鹿屋市役所駐車場到着後に解散

## 6 研修場所の概要

### ① 野口雨情の詩碑 (添付資料1)

昭和5年5月、野口雨情が鹿屋を訪れ、鹿屋小唄を作った。作曲は鹿屋出身の音楽家伊地知二郎。詩碑は昭和54年6月除幕、鹿屋青少年少女合唱団と信愛ママさんコーラスが「鹿屋小唄」、「七つの子」などの合唱をささげた。

野口雨情は大正6年生まれ、詩人、童謡・民謡作詞家。多くの名作を残し、北原白秋、西條八十とともに、童謡界の三大詩人と謳われた。代表作は『十五夜お月さん』『七つの子』『赤い靴』『青い眼の人形』『シャボン玉』『こがね虫』『あの町この町』『雨降りお月さん』『証城寺の狸囃子』など、枚挙にいとまがない。他に『波浮の港』『船頭小唄』など。(祖先は楠正季といわれる。)



### ② 野村伝四の生家と侘助 (現地でも説明)

### ③ 夏目漱石の俳句 (肝付町長能寺の野村傳四の墓)

野村傳四は明治13年10月20日に肝属郡高山村前田西方に生れ、東京帝国大学文科大学英文学科で教授の夏目漱石の弟子となる。傳四は漱石の弟子の中で最も愛され、小説『三四郎』のモデルであると言われている。傳四が結婚するときに、漱石が妻の鏡子に傳四に何を祝いしようかと相談したら、「何をと



いってもありふれたものばかりでつまらないから、いっそのこと貴方俳句をお書きなさい、それを袱紗に染めさせましょうから」と提案があった。その提案通りに、袱紗に漱石の俳句を2句染めて、2枚の袱紗を傳四に贈った。染めた漱石の2句とは、「二人して雛にかしづく楽しさよ」と「日毎ふむ艸（くさ）芳しや二人連」である。

傳四の墓の裏には、「日毎ふむ艸芳しや二人連 漱石」と刻まれている。漱石の弟子の研究者である四宮義正氏によると、漱石が弟子に俳句を書いたものを贈り、さらに漱石の俳句を刻んだ墓は、他の弟子には無いそうである。これらの話は、傳四が漱石夫妻にいかに愛されていたかを物語っている。



④ 日高藪仙の歌碑（現地で口頭説明、添付資料2）

⑤ 道隆寺の歌碑（現地で口頭説明）

⑥ 昌林寺の墓碑

亀山忠良は、島津宗家奥州島津家の当主である島津勝久の嫡男である。島津家の内訌で宗家の奥州島津家は家督を伊作島津家に奪われてしまい、12代当主島津勝久は当初根占にその後豊後に追われる。勝久の子、忠良は当初母の生家である祢寝氏の本拠地である根占に住んでいたようです。後に弟が住んでいた高山に移り住み生涯を終えた。子の亀山忠辰の墓も当墓地にあります。また、墓地の近くに「亀山どんの一町屋敷」と言われた屋敷跡があるそうです。

本来なら島津宗家を継ぐべき人、亀山忠良。その忠良が皮肉にも島津一族の永年の宿敵であった肝付氏の本拠地高山に何故、身を寄せなければならなかったのでしょうか…単なる運命の悪戯・偶然なのでしょうか、それとも島津宗家を乗っ取った島津忠良（伊作島津家）あるいは肝付家当主兼久それぞれの深謀遠慮によるものなのでしょうか…「島津」という由緒ある姓を名乗れない亀山忠良の粗末で小さな墓碑でありますが多くの事を我々に問い掛けて呉れます。



亀山忠良、忠恒の墓碑はいずれも、大きくも立派でもないので案内板がないと気付かないでしょう。当然、案内板は町の関係機関（「肝付町観光協会」とか「肝付町教育委員会」とかが…）が作成したものだと思ってしまうのですが良く見ると「肝付町観光案内人」と書いてあります。実は「肝付町観光案内人」とは、今、ここで説明をされている福谷平様のことです。福谷様が自費で作成された案内板が肝付町のあちこちで見られます。

<島津家内訌前後の島津宗家（奥州島津家）の略系図>

島津忠良（伊作島津家）

↓ 子

⑫島津忠治—⑬島津忠隆—⑭島津勝久—⑮島津貴久（養子）—⑯島津義久

子 ↓

島津忠良（亀山忠良）—忠辰

島津貴久の父島津忠良と島津忠良（亀山忠良）混同しそうですが…。別人です！



⑦ 志布志駅前 山頭火の句碑（現地で口頭説明、添付資料3）

⑧ 夏井海岸の火砕流堆積物（現地で口頭説明、添付資料4）



⑨ 六部父娘の辞世

六部巡礼とは全国の66ヶ所の社寺・霊場を巡りお参りする（法華経を一部ずつ納める）信仰のことです。鎌倉から江戸期に流行したようです。現在の四国お遍路と同じような巡礼です。天正時代、六部巡礼の父と娘がこの近くの夏井番所で差し止められた。父娘は何度も番人に懇願したが受け入れられなかったため思い余って父娘は海に身を投じた。その遺体はこの近くの瀬に打ち上げられた。以来、そこは六部瀬と言われようになった。二人を哀れんだ住民がその霊を慰める為ここに墓碑を建てた。墓碑には「天正0十七年八月一日」の刻字がある。



墓碑には身投げした父娘の辞世（下記）が記されている。

<sup>のり</sup>法の身に濁りあるとは汲んでみよ如何に夏井の関守の人

この近くにあった夏井番所は薩摩藩の中でも特に厳しい境目番所で常時10名の番人が見張っていたという。また間道抜けを取り締まる八郎ヶ野番所（笠祇岳付近）も近くにあったそうです。

夏井番所の取締りの厳しさを今に伝える「六部父娘地蔵」です。

この近くにダグリ岬があります。この「ダグリ」という地名からも夏井番所の厳しさを知ることができます

夏井番所では馬の荷も一旦、降ろされ、薩摩の馬に荷を積みなおしてから領内に入れたそうです。これを「荷駄繰り（にだぐり）」と言い、この荷駄繰りが転訛し「ダグリ」と呼ぶようになったのだそうです。

⑩ ダグリ 山頭火の句碑（現地で口頭説明、添付資料3）



⑪ 肆部合(しぶあい)の板碑（添付資料5）

志布志市指定文化財。板碑は死者の追善供養、または生者の逆修のための石塔である。年号の「暦応」は北朝年号である。同じく北朝の板碑は高須の波の上神社にある。有明町内で刻字がある石造物では最古のもの。



# ●歴史のあと

## 1 野口雨情、鹿屋へ来たる

昭和一五年五月写す。これはまったく珍しい写真である。野口雨情が、鹿屋小唄を作るために鹿屋を訪ねてきていたという。今まで、鹿屋市内でもほとんどの人知らないことであった。この写真はその時写したもので、鹿屋市の水道の水源池のある城山でのもの。写真は、向って中央の人が野口雨情で、その右は鹿屋市中馬厚生課長、隣りが小城社会教育課長である。この時作つた雨情の作品は、鹿屋市出身の音楽家伊地知二郎氏が作曲、レコードインもしたが、時局柄、いつの間にかうたわれなくなつて、今日まで知る人もなく埋もれていたもの。今回偶然その歌詞とともに歌曲も見つされた。

鹿屋小唄 野口雨情作詞 伊地知二郎作曲

一 忘れなまらな ナー  
大調鹿屋 ヤットサノサ  
新調鹿屋 ソレ

二 空の青きよ ナー  
高麗山に ヤットサノサ  
かかる雲さへ ナー

三 海の名所の ナー  
北田の池に ヤットサノサ  
波す浮きも ナー

四 切つちやらない ナー  
切らせてはるか ヤットサノサ  
こころは海神の ナー

五 お国柄か ナー  
土地の名物 ヤットサノサ  
酒に胡散に ナー

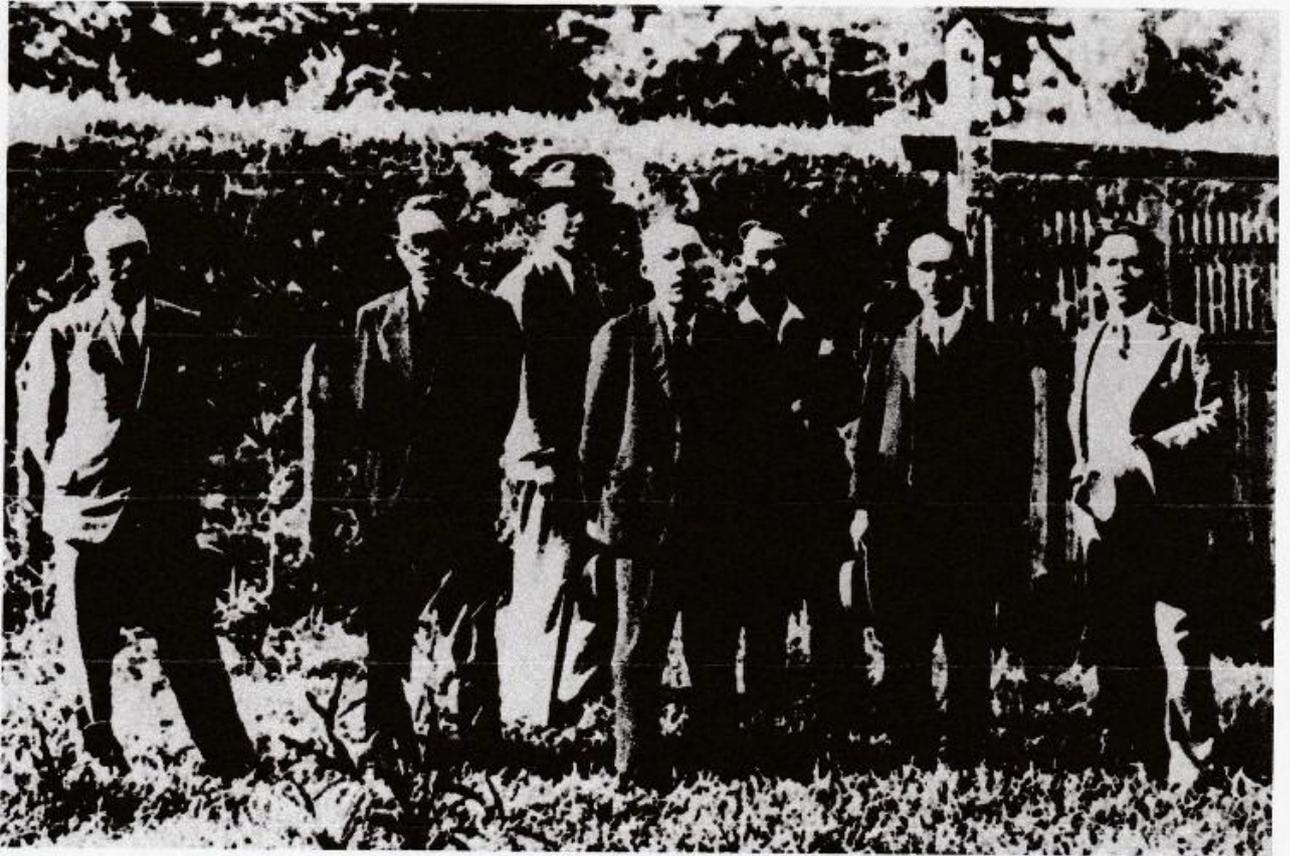
六 浜はさらさら ナー  
寄せては返す ヤットサノサ  
底の上 ソレ

サラサラサラリト サツテモナ

三味線 二上がり

(故伊地知二郎楽譜の中から転記)

わすれなまらな ナー おほすみーかのや  
ヤットサノサなんー ぼー ひやーくのなんぼ  
ひやくのネー しんー とー ソレ  
サラサラサラリト サツテモナ



添付資料 5 :大隅の南北朝時代の年表

		西暦			
	元弘 1	1331	元弘 1	徒然草	
後醍醐天皇隠岐へ	// 2	1332	正慶 1		
<b>高須の板碑</b> <b>建武の新政</b>	// 3	1333	// 2	足利尊氏挙兵、六波羅攻め 鎌倉幕府滅亡 <b>建武の新政</b>	
	建武1	1334	建武1		
中先代の乱 湊川の戦、楠正成戦死	// 2	1335	// 2	足利尊氏鎌倉へそして挙兵、 京を攻めるが、九州へ敗走	
<b>南 朝</b>				<b>北 朝</b>	
後醍醐天皇尊氏に降伏 三種の神器、尊氏へ 後醍醐天皇吉野へ、 <b>南朝</b> を 開く	延元1	1336	建武3	足利尊氏「多々良浜合戦」で 勝利 <b>光明天皇即位 室町幕府</b> <b>畠山直顕日向国大将</b> (土持氏、禰寝氏)	
<b>三条泰季薩摩へ下向、 南朝方姫木城攻め</b>	// 2	1337	// 4	畠山直顕、北朝方として 各地を優位に転戦	
<b>野辺氏、伊東氏下る</b> 新田義貞戦死	// 3	1338	暦応1		
<b>後醍醐天皇没</b> <b>後村上天皇踐祚</b> <b>三俣城落城、</b> <b>肝付兼重高山へ</b>	// 4	1339	// 2		
<b>東福寺城の戦い</b>	興国1	1340	// 3	畠山直顕が足利直義につく	
	// 2	1341	<b>// 4</b>	<b>肆部合の板碑</b>	
<b>懐良親王谷山に下向</b>	// 3	1342	康永1		
	// 6	1345	貞和1	<b>畠山直顕 日向守護</b>	
	正平1	1346	// 2	<b>畠山直顕 梅北に光明寺</b>	
楠正行戦死、 <b>楡井頼仲南朝へ</b>	// 3	1348	// 4		